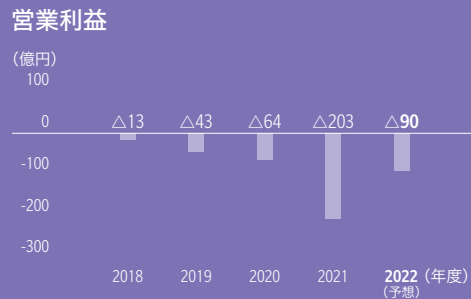
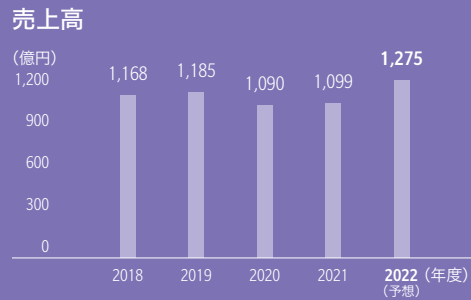


各事業の成長戦略



市場環境認識

機会

- 高付加価値イメージング、AI含むIT技術の活用進展、遠隔医療や、低侵襲医療ニーズの高まり。
- アジア地域など新興国において経済発展や長寿命化による医療ニーズの増加。
- リスク診断や確定診断のみでなく、コンパニオン診断や製薬での遺伝子検査ニーズの高まり。
- 先進国での長寿命化、医療技術の高度化、高価格化と相反する総医療費削減要請。

リスク

- 巨大資本を持つグローバル大手企業の新規参入、新興国企業の成長などによる競争激化。
- 技術開発競争による自社技術のコモディティ化と低価格化。

各市場のCAGR (2020—2022年度)

ヘルスケア (メディカルイメージング)	X線診断装置	+1% ^{※1}
プレジジョンメディシン	バイオマーカー市場	+16.3% ^{※2}
	次世代シーケンシング市場	+31.4% ^{※2}

※1 2020→2022年 当社推定

※2 2020→2025年 BCC Research (2021)

成長戦略

● 診断機器領域では、動態解析による高付加価値X線システムを日米中から欧州、アジアへ展開。ワイヤレス動画撮影を備えた回診用X線撮影装置を世界に先駆けて展開し、救急医療現場の負荷軽減と医療品質向上を実現(→P24)。超音波診断装置はフィルム技術を応用したプローブと信号処理技術による高画質、穿刺針強調処理などの補助機能を活用し整形外科、産科に加え、透析や麻酔科へ拡大。超音波「診断」を「診療」に進化し新しい価値を創造。医療IT領域では、国内で約2万施設の顧客基盤を構築した「infomity」を軸に、遠隔医療サービス、施設間連携などを展開。またPACS (医用画像保管・転送システム)の展開地域を日米からASEANへ拡大。両領域とも協業によるお客様への価値提供の最大化を図る。

● 遺伝子診断領域では、精度の高い独自技術であるRNA検査の展開により診断の高度化に貢献。健診用の遺伝子診断「CARE Program」を日米で検査数を拡大し予防医療に寄与。東京大学および国立がん研究センターとの共同開発による新規パネル検査の上市により個別化医療への貢献を目指す。創薬支援領域では、中枢神経、がんの治験受託拡大。また、遺伝子、病理、画像データの統合による独自の統合診断データプラットフォーム「Lattice」を確立し、疾病の早期発見に貢献するとともに、製薬向けにデータビジネスを展開し、製薬プロセスの効率化に寄与。

戦略的KPI

	2021年度 目標/実績	2022年度 目標
DR一体型X線システム、 動態解析、アジア事業の 売上高伸長率	+8%以上 →+20% (実績)	+15%以上
医療ITサービスの 売上高伸長率	+5%以上 →+9% (実績)	+8%以上

各事業の成長戦略：ヘルスケア事業

Close Up

ベッドサイドでのX線動画撮影を可能にする回診用X線撮影装置を発売

コロナ禍で高まる
巡回診療のニーズに応える

新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界各国の医療提供体制が逼迫し、ICU(集中治療室)の重要性が再認識されました。そうしたなかで、ICUや隔離病棟に入院している患者さまの病態管理を行うために、回診用X線撮影装置の重要性が増えています。特にICUにおいては刻一刻と患者さまの病態が変化するため、常に迅速かつ正確な診断が求められますが、重症患者の検査室への移送が難しいなど、高度な検査を行うには手間も時間も要するといった課題が顕在化しました。

当社が2022年3月に発売した「AeroDR TX m01」は、世界に先駆けてワイヤレス動画撮影を実現した回診用X線撮影装置です。この製品の長は、従来の回診用装置ではできなかったX線動画撮影が可能なこと、それをワイヤレス(無線)で実現したことにあります。また、当社のX線動画解析ワークステーションと組み合わせて使用することで、横隔膜の動きを定量化したり、肺野内の血管や肺胞といった組織の動きの変化を高度な画像処理でカラー表示して可視化したりと、今までの静止画では得られなかった情報を

医師に提供することができます。

ICUや隔離病棟などに入院しているような移送が難しい重篤患者は、CTやMRIといった精密検査を受けることが困難なため、血圧、体温、脈拍、呼吸数などのバイタルサインを測定する機器から得られる限られた情報で病態管理が行われているのが現状です。AeroDR TX m01では、人工呼吸器を装着している患者さまであっても簡単に呼吸状態を動画像として捉えることができます。動画像情報と生体モニタリング情報とを組み合わせることで、合併症の有無や重症化のサインを見逃さない高精度な病態管理の実現が期待されます。



ベッドサイドでのX線動画撮影を可能にした「AeroDR TX m01」

世界初の製品の価値を、
世の中に広めていく

AeroDR TX m01の開発は、まさにコロナ禍で行われました。自社ブランドとしては初めての回診用X線撮影装置という戦略的商品でありながら、新型コロナウイルス感染症の重症者の治療が行われるICUがターゲットであること、OEM供給元である海外パートナー企業や米国販社との連携が不可欠であることなど、コロナ禍で実行するには非常に難易度の高いプロジェクトでした。しかし、毎日のように関係者と打ち合わせを行い、目標に対する意識合わせ、臨機応変な計

画変更など、この製品の開発に携わる多くのメンバーが一致団結することで、質の高い製品を迅速かつ効率的に開発することができました。

X線動画撮影が可能な回診用X線撮影装置は、これまで世の中になかったものです。この製品を世に広めていくためには、その可能性に強く共感していただけるKOL(キー・オピニオン・リーダー)の力が必須だと思っています。今後、国内外においてKOLからの評価をより多く獲得し、顧客目線でAeroDR TX m01の有用性、価値を発信していけるような仕組みづくりを進めていきたいと考えています。

コニカミノルタ(株)
ヘルスケア事業本部モダリティ事業部
中村 一起

コニカミノルタ入社以来、ヘルスケア事業に従事し、主力製品であるデジタルX線撮影装置「AeroDR」の販売立ち上げを担当。現在はX線事業全般の事業企画、マーケティングを担う部門のグループリーダーを務める。

